

落合雄彦・金田知子編著

『アフリカの医療・障害・ジェンダー——ナイジェリア社会への新たな複眼的アプローチ——』

見洋書房 2007年 ix+257ページ

まきのくみこ
牧野 久美子

本書は、アフリカ、特にナイジェリア社会における病気、障害、医療、ジェンダーをめぐる諸問題に様々な角度からアプローチしている。最も重点的に取り扱われているのは薬物依存治療を含む精神医療で（第1章～第5章）、第6章、第7章は障害、第8章は感染症、そして第9章、第10章はリプロダクティブ・ヘルスに関わる内容となっている。

第1章「植民地期の精神医療施設」（落合雄彦・金田知子）は、ナイジェリア、シエラレオネ、南アフリカなど、旧英領植民地の精神医療施設の歴史を、イギリス本国の動向を踏まえながら丹念に追っている。

第2章「薬物乱用」（アデボイエガ・オグンレシ）は、ナイジェリアにおける薬物乱用について、歴史、乱用のパターン、治療法を概説している。第3章「薬物依存者へのインタビュー調査」（金田・落合）は、ナイジェリア南西部の2つの精神科病院で入院治療を受けている薬物依存者へのインタビュー調査の記録で、薬物依存治療における家族の支援の重要性などの共通点が明らかにされる。

第4章「精神障害当事者が語るライフ・ヒストリー」（あるナイジェリア人精神障害者の女性）は、編者が調査のなかで出会った統合失調症の女性が綴ったライフ・ヒストリーである。病気や障害を生きる当事者に寄り添う本書の姿勢を象徴する章である。

第5章「精神医療の多元性と自己の危機」（近藤英俊）は、近代的な生物医療のほかに、信仰による治療（イスラーム、キリスト教）、薬草や儀礼による伝統的治療などが併存するナイジェリアの「多元的医療」状況が、精神病者の自己を危機に陥れ、不

安定化するさまを論じている。

第6章「障害者リハビリテーション」（林正樹）は、ナイジェリアの障害者リハビリテーションについて、施設中心型アプローチから「地域に根ざしたリハビリテーション」（CBR）へという障害者支援に関する国際的な潮流との関連で論じている。

第7章「ろう者コミュニティと手話」（亀井伸孝）は、手話言語を話すろう者コミュニティを、その地域で歴史的に形成された言語的・文化的集団ととらえ、フィールドワークを通じて、A・J・フォスターらろう教育の先達たちの貢献など、ろう者コミュニティが共有している歴史の内容を明らかにする。

第8章「感染症対策」（古閑純子）は、ナイジェリアで深刻な保健問題となっているマラリア、HIV／エイズなどの感染症に関して、現状、対策、課題を概観している。国際的な潮流に沿った対策がとられつつも、保健医療サービス体制が弱体であるために、効果を上げにくい状況であることが指摘される。

第9章「リプロダクティブ・ヘルス」（オラスルボミ・オゲデングベ）は、妊産婦死亡、女性性器切除、HIV／エイズ、人工妊娠中絶、不妊といった、ナイジェリアの女性が直面するリプロダクティブ・ヘルスの課題を概観している。第10章「産科瘻孔（フィスチュラ）問題」（落合・金田）は、リプロダクティブ・ヘルスの課題のなかでも、あまり関心が向けられてこなかった産科瘻孔を取り上げ、治療可能なフィスチュラのために長年苦しむアフリカ女性の多さから、フィスチュラは単なる「生物医学的な疾患」ではなく、保健、教育、貧困、ジェンダー、権力関係などの諸問題が複合的に作用する「社会的な病理現象」であると指摘する。

本書の特徴は、精神障害当事者が綴った第4章をはじめとして、病気や障害を生きる当事者の声を豊富に収録していることにある。編者はこれを、執筆者の国籍の多元性、専門分野の多様性とあわせて、「複眼的」アプローチと呼んでいる。本としての統一感が若干犠牲になっているきらいはあるが、アフリカの「多元的医療」の現実をあぶり出すうえでも「複眼的アプローチ」は有効であるといえよう。

（アジア経済研究所地域研究センター）